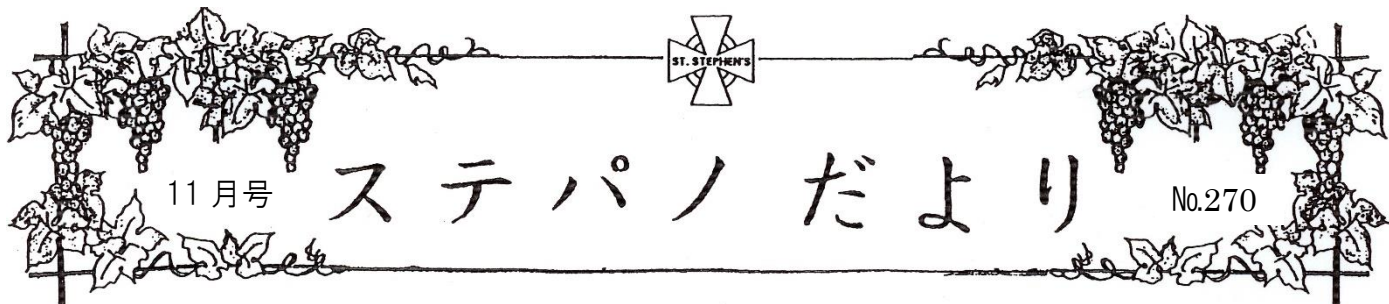




11月号

ステパノだより

No.270

23日(金) 二学期終業礼拝
16日(金) クリスマス祝会
15日(木) クリスマス礼拝

◎12月の予定

30日(水) 時間割変更期間～12月23日
29日(火) 音楽会
28日(月) 私学振興大会(横浜)
26日(土) 学校説明会③
25日(金) 教職員協議会
21日(月) 二学期期末試験(中)～24日
20日(月) 西地区陸上記録会(平塚)
18日(金) 収穫感謝礼拝・教務委員会
17日(木) 避難訓練(小1～3)
16日(水) 避難訓練(小4～6)
12日(土) 内部進学考査
11日(金) 内部進学者考査・自宅学習日(中)
8日(火) 体験学習(転入)～10日
4日(金) 避難訓練(中)・ビーチクリーン(中)
1日(火) 授業参観～2日

◎11月の予定

今月の聖句
『涙と共に種を蒔く人は
喜びの歌と共に刈り入れる。』
詩編 第126編5節



運動会

10月8日、3年ぶりの運動会が開催されました。従来通りお昼をはさんで、という訳にはいきませんでした。小中一体となつて一つの行事を作り上げるその姿は、いつも以上に輝いて見えました。

◎今月の行事から

ビーチクリーン(中学校) (11月4日)
代表委員会の話し合いの中で、自分たちでできる活動を行いたいとの思いから計画しました。SDGsに関連した内容でもあるので、この活動を通して、関心を深めていってほしいと思います。身近な大磯の海を、力を合わせてきれいにしていきます。

収穫感謝礼拝(11月18日)

収穫の秋を迎えました。学校の給食はもとより、私たちの食卓にある作物は多くの人の手を通して届けられているのだということ、そして神様の豊かなお恵みがあることを改めておぼえ、感謝をささげたいと思います。

音楽会(11月29日)

コロナ禍のため全校が一堂に会することはできませんが、感染症対策などの諸準備をし、学年ごとに分かれて実施する予定です。

音楽に親しみ表現する楽しさを感じる時間とし、そして神様に賛美をささげる気持ちをもって歌っていきたいと思います。



さかなクン

学校長 佐藤 紀明

さかなクンは、東京東洋大学客員准教授・東京海洋大学名誉博士という立派な肩書きを持ち、「ギョ、ギョ、ギョー」と、甲高い声と高すぎるテンションで話す姿が特徴的です。

タレントとしても活躍していますが、一度、講演会に参加したことがあります。魚の知識量、魚についての分かりやすい説明、親しみやすい雰囲気など、素晴らしいと感じました。幼い頃から海洋生物が大好きだったようで、毎週のように水族館に通い、水槽の前で魚をじっと観察する日々を送っていたそうです。

中学3年生の時には、学校で飼育していたカブトガニの人工孵化に成功し、新聞に取り上げられ話題になっています。高校生3年生の時に『TVチャンピオン 全国魚通選手権』という番組に出場し「天才高校生」と呼ばれ準優勝しました。その後も行われた同選手権では、なんと5連覇という快挙を成し遂げています。その中で、現在の芸名『さかなクン』という名前と呼ばれるようになったのです。動物関係の専門学校を卒業した後、水族館、魚を取り扱うペットショップなど、魚に関係する様々なアルバイトを経験したそうです。働いていた寿司店で魚のイラストを描く機会があり、その絵が好評で、魚の絵のイラストレーターとしても活躍することになりました。

2010年には、絶滅したといわれていた『クニマス』がまだ生存していることを発見して、魚類学者でもある今上天皇から称賛のお言葉が贈られています。現在も魚類学者やタレントとして忙しい毎日を送っています。

講演会の中で特に印象深かったのが、母親の『さかなクンに対する向き合い方』でした。「あれをしなさい」「これはしてはいけない」という強要を絶対に行わなかったそうです。

魚が大好きなさかなクンは、毎週のように水族館へ行き、水槽の前でじっと魚を観察していたそうです。お母さんは、そんなさかなクンを咎めることも、急かすことなく、気の済むまで眺めさせて見守っていたそうです。それに加え、お母さん自身も「息子が興味を持つている魚に興味を持つ」というスタンスでした。さかなクンがタコに夢中になった時は、毎晩の料理がタコ尽くしだったそうです。

我が子の好奇心を押さえつけず、しっかりと認めて、子どもが「何かに興味を持つて、それを探求することは素晴らしいこと」だと考えているからこそできることだと思います。

ある日、さかなクンは突然「ウマヅラハギを家で飼いたい」と思ったそうです。さかなクンはお母さんに頼んで一緒に鮮魚店に行き、ウマヅラハギを購入しようとしたそうです。「水槽で泳いでるウマヅラハギをください」しばらくすると、板前さんがウマヅラハギの姿造りを持ってきました。この時も、一切口を挟まなかったというさかなクンのお母さん。

お願いすること、失敗してどう対応するかも、全て後ろで見ているだけだったそうです。お母さんは、失敗することの大切さを、身をもって学んでもらいたかったのでしょう。

一番難しいことかも知れませんが、さかなクンのお母さんは「失敗しても叱らない」という姿勢を一貫して取ってきたといいます。自宅に10個の水槽を置いていたそうですが、畳の上に直接置いていたので、畳が黒ずんで腐ってしまったそうです。それでもお母さんは怒ったり、怒鳴ったりはせず、「水槽って畳に置いてちやダメだったのね。」と、ケロッと言っただけでした。それどころか、誕生日には新しい大きな水槽を買ってあげたそうです。

子どもは『失敗したら怒られる』と思えば、何かをすることをためらうかも知れませんが、お母さんの「好きならとことんやりなさい」という姿勢に、いつも助けられたそうです。

子どもが夢中になっているもの、大好きなことがあったら、続けて欲しいです。好きなことを追い続けるのは素晴らしいことです。将来に繋がらないかも知れませんが、それでもいいと思います。夢中になって一つのことに打ち込んだ経験は決して無駄にはなりません。人生のどこかできつと役に立つと思います。「子どもの意思や行動を肯定する声かけ」と「好きなことに熱中するためのサポート」は、とても勇気があることだったでしょう。

子どもの良いところを伸ばし、信じること。素晴らしい『子どもへの向き合い方』です。

可能性

事務長 佐藤 雅美

ある時にこんなつぶやきを見ました。

「よろしかったでしょうか」と言われると軽く耳に障るのに、「うじゃないですか」と誰かに言ってしまった時、私はかなりへこむ。

「よろしかったでしょうか」とか「うじゃないですか」というのは、相手に判断を丸投げしている言葉遣いです。言い換えれば、発言者が自分自身の言葉に責任を持っていないと感じます。

社会人になると敬語を使うのは当たり前で、でも知らない間に身に付いてしまっている敬語があります。代表的なものが「よろしかったでしょうか」という言葉です。意外と使っている人も多いですし、自分でも良かれと思つて使ってしまう事があります。

「よろしかったでしょうか」という言葉は間違つた敬語だと言われることも事実です。

でも、それとは反対に実は正しい敬語だと言われる事もあります。

一体どっちが正しいのか迷ってしまいます。学校で習ったわけでもないのに、自分たちの生活の身近なものとなっているバイト敬語です。これらの言葉は相手に柔らかい印象を与えるための気遣いとして使われることも多いと思います。でも正しい敬語ではないので、

聞いている人に違和感を与える可能性が高いです。

少なくとも「よろしかったでしょうか」とか「うじゃないですか」という言葉は、私は使わないようにしよう。そう決めていても、特に「うじゃないですか」をぼろつと使ってしまうことがあります。結構へこんでしまいます。

言葉は伝染するものです。また影響を受けやすいものです。だからこそ、子どもたちから「古くさい」と言われようとも、自分自身がよろしくないと感じるような言葉は使わないようにしたいです。

長い歴史の中で、たくさんの言葉が生まれました。消えていく言葉もあるし、時代が変わっても残る言葉もあります。残つた言葉も変化を遂げ、過去と現代とは意味が異なつた使い方をされている場合も、多々あります。その時代に生きた人が「理にかなっている」と判断して選択し、言葉が緩やかに変化していくというのは、人類の歴史です。

また、電車の中である広告に目が留まりました。「知らないことばかりだと、疑問さえ持てない。」とてもいい言葉だなあと何度も読み返しました。因数分解など、私の人生の中で何の役にも立っていないような気がします。私は解き方をすっかり忘れてしまいました。

世の中にはこういう世界もあるのだということを知っていないと、取捨選択ができないものです。

頭の片隅に言葉だけでも置いておくことは、決して無駄ではありません。情報量の多いこの時代にわかつたような気分になって、学ぶ前から「無駄」と決めつけてしまうのは間違っています。

食わず嫌いと同じで、とりあえず口に入れて味を確かめたら、意外とおいしいかもしれないのです。

何も疑問を持たないというのは、人間らしさがある意味否定しています。

今は好きなだけ勉強ができる時代です。子どもたちは、これから様々な人と出会う機会があります。自分のこれからの生き方を模索できる時代です。こんな贅沢な時間、社会人になつたらそうそう持てません。

私自身も、若い時にもっと自分を真摯に見つめ、前向きに勉強しておけばよかったと思うことがたくさんあります。でもいくら思つても、子ども時代には二度と戻りませんし、戻れません。

子ども時代は可能性です。これからの体験は、そのまま自分の糧になります。

ステパノの子どもたちが将来に向けてたくさんの経験をして、生活を送ってほしいな。とある広告を見て、そんなことを感じていました。



行事を通して学ぶこと

教諭 二挺木 健太

小さい頃から大好きだった運動会。私は昔から走ることが大好きだったので、徒競走やリレーをいつも楽しみにしていました。そして教員になった今でも毎年運動会を楽しみにしています。そんな大好きな運動会が新型コロナウイルスの影響で実施出来ないまま3年が経ち、今年度やっと実施することが出来ました。ただ、今までとは違い、午前中のみのプログラムに短縮し、保護者の観覧も各家庭原則1名までと変わった部分が多くありました。それでも新型コロナウイルスの影響で様々な行事が出来なかった頃と比べると大きな前進です。

運動会の前には体育の授業内で演技やリレーなどの練習に取り組んでいます。授業外でも各クラスでのぼり旗の作成している様子もあり、少しずつ運動会が近づいてきている実感が湧いてきました。子どもたちも運動会が近づくにつれて少しずつ変化が出てきました。

まず、一つ目の変化として子どもたちの挨拶や返事の声が大きくなっていました。コロナ禍になってからマスクを常に着用しているため、口元の動きが分からず、声もこもってしまいがちで子どもたちの挨拶も聞こえづ



らい時もあります。しかし、運動会が近づくにつれて少しずつ声が大きくなり、挨拶や返事がはつきりと聞こえるようになってきました。そしてその挨拶や返事にはやる気みなぎっており、子どもたちのエネルギーが溢れるように思えます。

二つ目の変化は時間を守ろうと意識していたことです。運動会のようにクラス単位での活動ではなく小学校と中学校それぞれや全校での活動が増えると、整列をするだけでも時間がかかります。それぞれの担任の先生方のお力もありますが、体育係を中心に子どもたちで時間を確認し、運動会の練習が始まる前までに整列しようとする子どもたちが少しでも多くなったことは嬉しいことです。

今回、運動会で子どもたちに見られた変化はこれから子どもたちが大人になり、社会に出ていく時にも必要なことです。大人になってから出来るようになる人もいるかもしれませんが、子どもの時から挨拶や返事、時間を守る習慣を身に付けておくことは大事です。それをステパノにしている間に日頃の生活や行事を通して学んでいって欲しいです。ステパノは昔から行事を通して子どもたちを育てていくことを大切にしていま



す。小学校、中学校それぞれの行事もあれば、

サマーキャンプやステパノまつり、そして今回の運動会のように小学校と中学校一緒に行う行事もあります。学年、そして小中の枠を超えた縦割りの交流が出来ることや一人ひとりに役割があり、やりがいと責任を持って行事に取り組むことができ、その結果、行事を終えた後はそれぞれが達成感を持てることなど小さな学校だからこそ学べるところがステパノの良いところだと思います。その中で一つでも多くのことを学び、自分自身の成長に繋げていって欲しいです。新型コロナウイルスの影響もあり、以前と同じような活動はできず、その時代に合わせて色々と変わっていくことも多くありますが、行事を通して学ぶということが変わっていくことはないと思います。新型コロナウイルスに負けず、一つでも多くの行事を実施できることを願っています。

今、学園では運動会が終わり遠足・修学旅行と一息つく間もなく、次の行事に向かって準備をしています。それが終わるとすぐにクリスマス祝会に向けての準備が始まります。忙しなくありますが、行事を通して、様々なことを学び、一人ひとりが自分たちの良さを発揮しながら成長していく姿を楽しみにしています。



言葉の力

教諭 石川 瑠一

通勤のとき、町を歩くとキンモクセイの香りがふわりと鼻をくすぐる季節になりました。この香りを嗅ぐと、自分が小学生の頃の思い出がふと顔を出し、ノスタルジックな気分になります。秋はもちろん、ひいては冬の気配というもので連れてきているように感じます。最近の言葉ではこの素敵な感覚を「エモい」と表現します。決して悪いことではないのですが、国語の教員としては何でもかんでも「エモい」で表してしまう昨今に少しさびしさを覚えます。

さて、キンモクセイを例に挙げましたがこの文を読んでくださる方は「花」と聞いたとき、何が一番に思い浮かぶでしょうか。日本には四季があるため年中素敵な花々があちらこちらに咲いています。秋と言えば木犀はもちろん秋桜や菊、もう少し寒くなると薔薇や椿。さっと挙げるだけでもこれだけの種類が出るのですから先の質問の答えは人によって様々であることと思います。そんな中今回は季節外れもいい所ですが、国語の教科書に桜の話で非常に良いものがあつたので紹介させていただけだと思います。

桜色という色があります。名前の通り、桜の花びらのような淡いピンクであり、初出は平安時代の『古今和歌集』とされています。千年以上前から日本で愛され、着物など様々

なところで用いられてきた色です。このえもいわれぬ色合いは、もちろん花びらから抽出したものだと知らない人は誰もが思います。しかし実際に桜色の染め物をするとき、使われるのは花ではなく幹や枝であるそうです。開花直前の黒くごつごつした幹の周りの皮を煮だして抽出することで、桜色に色づきます。つまり、花びらのピンクは木全体がピンクに染まっているほんの一部が可視化されたものにすぎないのです。

この時点で薄学であつた私は驚きが隠せなかったのですが、教科書はこう続きます。

これは言葉の世界でも同じことが言えます。言葉の一語一語は、花びらの一枚一枚であり、言葉というものの本質が口先、語彙だけのものではなく、発した人間全体の世界を背負っているのです。

この内容を目にしたとき、授業としてどう教えるかを考えるのと同時に自らの身が引き締まったことを思い出します。私たちが発する言葉には、その人が持つ考えや思いなど内面がすべて反映されます。同じ言葉でも、使う人によってありふれた言葉にも、美しく正しい言葉にもなりうるということです。教科書の内容に、教員として働く覚悟を問われているように感じました。

小学生から数えて十六年間の学生生活を終え社会人として働き始めた今年、子どもたちに与える影響力の強さ、責任の大きさというものにプレッシャーと幸せのどちらもをひし

ひしと感じる日々を過ごしています。「まだまだ学生と変わらないこんな自分に務まるのだろうか、自分でいいのだろうか。」そう思ったことも両手の指では数えきれません。しかしそれ以上に子どもたちが国語の授業で新しい心情の解釈を見つけた時の顔、友達と話す楽しそうな顔、いくつもの行事で各々の役割を担って成長していく真剣な顔、それらを見る度に「教員になってよかった。」と心の底から感じます。体格も精神もぐんぐん成長していく子どもたちを誰よりも近くで支えることができる教員という職業に運命を感じた半年間でした。ここから人生をかけてつとめていきたいと考えています。ただ子どもたちの成長を、手をこまねいて見ているようではいつか置いて行かれてしまいます。国語の教員として発する言葉に私自身の人生が反映されるように、今まで以上に言葉そのものというものと真摯に向き合っていかなければならないと思案しています。国語という教科の特性上、大人になっても題材を思い出せることが多いと思います。その記憶の端っこに先生の顔が思い浮かぶような、そんな特徴のある授業を試行錯誤していきたいです。

子どもたちの内に秘めたる「種」に言葉という水をあげて大輪が咲くような教育を追い求め、そしていつか自分も含めて学校全体が、百花繚乱となるように一緒に成長していきたいです。





「小学校」

3年ぶりの運動会、初めての「係活動」に奮闘した6年生の感想文を中心に紹介します。

運動会

小六 I・N

今日は運動会だった。十月の土曜日に行われたのだが、その準備をするために、土曜日はいつも寝坊をしているのだけど、早起きをして家を出た。

学校に来てみると、中学生はもう来て準備をしていて、ぼくのクラスのKくんももう来ていて、ぼくは二番目だった。

そろそろ本題に入ろう。無事に運動会が行われ、全校体操、エール交換、徒競走など順番に行われて、徒競走では転んだ子もいましたが、全員のがんばる姿が見られました。最終的には白組の勝ちになって、ぼくがいる紅組は負けましたけど、三年ぶりの運動会がとてもうれしく、競技をしていた時はとても楽しかったです。

係活動など、片づけも大変だったけど、人と協力したらすぐ終わって、無事に運動会を終えることができました。



運動会のこと

六年 H・R

10月8日に、運動会がありました。まず最初に、小1〜中3まで全体のラジオ体操をしました。すばやく体そうして、次に入場口へもどりました。赤と白に分かれました。おとといは雨かと思ったけれど、晴れて良かったです。お父さんが、大阪から見に来てくれました。

一番心に残ったのは、『輪になっておどろう』です。なぜなら、4〜6年生みんな、楽しくおどれるからです。ポンポンがきれいだし、競わないプログラムで、平和な感じがするからです。

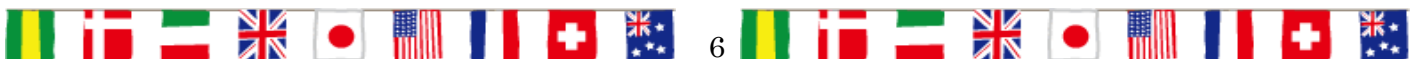
次は、『8の字とび』競うけれど、チームで競うし、一生けん命練習して、ミスなくうまくできたからです。私はみんなとやる競技が好きみたいです。



徒競走があつた時のことですが、私は一生けん命走ったのですが、4位になってしまいました。その時は、男子といっしょだったのですが、とても緊張しました。ちよつとくやしかったけれど、すごく良い勝負でした。

最後には、紅白対抗リレーがありました。走る時はなぜか、緊張はしなかったです。でも、みんなに拍手されて、ちよつとはずかし

かったです。リレーも徒競走も、どちらも競う競技でした。
スタートの白い線（注：バトンゾーン）に並ぶ時に、どこに並ぶかとまどつて、どうしようというろろしていたら、Nくんが場所（白い線）を教えてくれて、少しホッとして、走れました。感謝です。
私は、来年から中学生になるので、今度は空手をやってみたいです。中学生がとて



「中学校ステパノまつり同様、運動会も3年ぶりに開催されました。雨が続き、練習が少ない中、生徒たち一人ひとり懸命に活動に取り組んで成長した様子が数多く見られました。」

晴れた運動会

中一 O・M

雨かくもりと聞いた運動会が晴れました。先生から「晴れ」と聞いて、家の人には「雨」と聞きました。ステパノでは3年ぶりの運動会。それなのに、「雨が降って中止になったら…」と考えたらすごく残念な気持ちでした。でも、晴れてくれてすごくうれしかったです。

中学生みんな中学校に入ってから初めての運動会と聞きました。初めてなのは中一だけじゃないんだ。と感じ、安心して、それでも緊張と中学生としての責任を持って楽しく、全力で運動会ができました。

中学生の演技では、空手をやりました。練習の時は毎回間違えていて、正直自信はありませんでした。なので、家でもたくさん練習をしました。



いよいよ本番の時が来て、「きつとまちがえてしまうだろう。」と、自分の中で覚悟をしていました。ですが、出来たのです。自分でもビックリしました。毎日練習したかいがありました。

自分のチームは負けてしまったけれど、全

力ががんばったことは違いありません。大きなケガもなく、楽しい運動会が出来て本当によかったです。

3年ぶりの運動会

中二 H・M

久しぶりの運動会でした。今年は1〜12までのプログラムで一番印象に残ったのは、栄光への道です。なぜ栄光への道かというと、陸上部と走るからです。特にR君は陸上部のエース。そんな人と一緒に走るなんて「無理に決まってるじゃない！」と思っていました。でも、いざやってみると、なんと！R君を抜

かして2位！本当にうれしかったです。あんなに足の速い男子を抜かせてほんとうにうれしかったです。そして、紅白リレーは盛り上がりしました。小学校1年生から中学校3年生までバトンをつなぎ、勝利を争う競技です。25番目だったんですが、T君に抜かされたのがちよつと悔しかったです。



悔しかったです。

今年の運動会は係活動で放送係になり、台本の読み練習やスピーカーの設置をしたり、本部の机やパイプイスを置くなどの仕事がありました。一番大変だったのは、台本読みです。台本読みはアドリブなどがあるからです。私はアドリブは得意なんです、ペアでやる子が苦手でした。でも、逆に読みがすこ

く上手でした。私は読みが苦手なので、どちらも支え合っている感じで、良いコンビになりました。

今年の運動会は色々と学べました。テントをどうやって分解したら入れられるか、スピーカーはどうやって組み立てるか等、すごく学べた一週間でした。来年も運動会ができることを願っています。

最後の楽しかった運動会

中三 I・N

去年と一昨年はコロナの影響で、ちゃんとした運動会が出来ませんでした。小6の時に編入してきた私にとっては、今回がステパノにきて初めて最後まで出来た運動会でした。運動会が出来なかった間のスポーツ大会では体育係が中心にやっていました。今回の運動会ではみんなで意見を出し合ってみんなで係活動ができて良かったです。一番楽しかったのは栄光への道です。風船を割る時に一番だったので内心喜びながら走っていました。シールめくりで苦戦したり、急ぎすぎで靴を半分しか履かないままのゴールでしたが、一位を取れて嬉しかったです。ステパノ最後の学年でようやく初めて紅白リレーが出来たこともとてもいい思い出になりました。





前号に続き、分身ロボット OnTime を介したカフェ運営で、社会参加の先駆的なあり方を実現し、「誰も孤独にならない社会」を目指す吉藤オリイさんの原点と展望を見つめます。

幼少期から病弱だった吉藤さんは、十一〜十四歳まで学校に足が向かず、「孤独感」に苛まれたそうだが、一人の先生との出会いから意欲と目標が生まれたという。以来、様々な節目で「人生の大きな変化は、人によってもたらされる」と実感し、テクノロジーの進展によって利便性が増しても、人は、「人の営みに参加する」ために外に出かけ、「人に出会う生き物なのだ」と考えるに至ったそうだ。

中学一年時のロボットコンテスト会場では、一輪車をこぐロボットを展示する先生と出会い、憧れ、その先生が教える工業高校での物づくりを囑望したという。学びの遅れを取り戻す努力を重ねた入学後、特別支援学校の生徒の車椅子を押して感じた不便さへの衝撃から、次世代型車椅子の開発に参加する。傾きを感じし自動で水平を保つ機能に、段差を登る技術を持ち、尚も美しいデザインの「電脳車椅子」は、JSEC コンテストで優勝し、世界大会へ出場する。他国の出場者に刺激を受けて世界観も人生観も一新し、残りの人生

をかけて真に取り組みたい課題は、「孤独の解消」なのだと明確化したという。

卒業後、高専に進学、人工知能を研究し、「人を癒せるロボット」の開発に注力したが、「人を本当に癒せるのも、また人だけだ」と思い至り、一年で進路変更をして早稲田大学に入学した。夢アワードなど数々のコンテストで優勝を重ね、「賞金は使えばなくなるし、栄光は時間と共に消えるが、良い出会いはその後ずっと人生を豊かにしてくれる」と実感したそうだ。そして、交通事故による頸髄損傷から肢体不自由となった人（後に秘書として協働）や、進行性の難病 ALS を発症した人との出会いと自身の療養体験から、「心の車椅子」をコンセプトとして、外出困難を抱える人のもうひとつの身体としての「分身ロボット」開発に一人邁進した。「わくわく感」を原動力に、時間も費用も限界まで注ぎ込む制作過程で活かされるのは、学生時代のパントマイムやキャンプ場で働いた経験など、人とは異なる体験であり、失敗も含めて「経験こそが無敵の財産」なのだと振り返る。

吉藤さんが創り出す新しい働き方は、体よりも心が資本となる。その人らしさを表現して生きること、人との出会いの中で役割を果たすことが、私達に与えられた大切な使命なのだと、カフェを訪れた私達に示してくれた。吉藤健太郎『「孤独」は消せる。』（二〇一七年）吉藤オリイ『ミライの武器 「夢中になれる」を見つける授業』（二〇二二年）

STEPHEN'S NEWS

《表彰》

◎日本漢字能力検定

二級	中三	佐藤 輝歩
三級	中二	澤村 悠人・川瀬 蓮
	中三	熊山 春輝・秋野 主帆
四級	小六	清水 詩夢
	中二	高橋 優真
五級	中一	藤原 千聡・山崎 陽太
		梅原 菜々子
六級	小六	橋場 璃南
	中一	井川 陽向・重松 大宜
七級	小五	澤村 栄伸・関野 然心
		寺内 岳
八級	中一	松本 晃
九級	小六	松島 光春
十級	小二	戎谷 悠利
◎中郡中学校総合体育大会 駅伝の部		
区間賞	中三	大城 志優録

【編集後記】

運動会を終え秋から冬へ季節は移り変わっていきます。ジェットコースターに乗っているかのような気温の変化も、徐々に落ち着き、上着が脱げなくなっていくそうです。（り）

発行者 聖ステパノ学園小学校・中学校

校長 佐藤 紀明

ステパノだより編集委員会

〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯868
TEL 0463-611-1298
FAX 0463-611-9739